
大和

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大和

【Nコード】

N2233S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

いつも呉にその雄姿を見せていた大和。だがその姿が見えなくなつた時に。戦艦大和を書いてみました。

第一章

大和

常にだ。その船はあつた。

呉にいとだ。誰もがその雄姿を見ずにはいられなかつた。

「やっぱり大きいな」

「ああ、しかも大きいだけじゃないしな」

「格好いいよな、あの姿」

「全くだよ」

誰もがその姿を見てだ。笑顔で話すのだった。

「それに何か奇麗だよな」

「そうだな。見ていたら惚れ惚れするな」

「いい姿だよ」

「あんな船は他にないな」

こつも話される。その姿を見てであつた。

呉の港にその美しい姿を見せているのはだ。軍艦だった。その名は。

「それに名前もいいな」

「ああ、大和な」

「いい名前だよな」

「そうだよな」

こつも話されるのだった。その雄姿を見る人達にだ。

大和は呉にいてだ。全ての者を惚れ惚れとさせていた。それは海軍の者達も同じだった。むしろ彼等が最も惚れ込んでいた。

港に集まる軍艦達の中でもだ。大和の存在感は抜きん出ていた。それを見てであつた。彼等はうつとりさえなっていた。そしてであつた。

彼等も言う。海にある大和を見ながら。

「あれが帝国海軍だな」

「ああ、格好いいだけじゃない」

「しかも美しい」

「あれこそがだよ」

こう話していくのだった。

「この戦争もあの船がある限りな」

「負ける筈がないぞ」

「絶対にな」

「それはないからな」

「大和がある限りな」

そう固く信じていた。海軍の者達がだ。

大和は戦争がはじまると共に呉にいた。そこで見事な姿を見せ。

そして戦場に出てもだった。やはり誰もがその姿を見ただけで惚れ惚れとなった。

出港するその瞬間も、海を進むその姿もあまりにも絵になった。

漁師の親子が小船からそれを見てだ。やはり惚れ惚れとなっていた。

「あれが大和だぞ」

「大きいね」

子供は父親の言葉にだ。興奮している声で応えた。

「あんな大きい船って他にないよね」

「そうだろ。しかも大きいだけじゃないだろ」

「うん、格好いいね」

砲塔も艦橋も煙突も。そして全体のシルエットもだった。

何もかもが見事だった。親子はそれを見て話すのだった。

「あの船があつたらね。日本は絶対に」

「負けないぞ」

父親は強い声で子供に話した。

「大和ある限り日本は負けないからな」

「うん、負けないね」

「そうだ、負けないからな」

二人もそのことを信じていた。誰もが大和を見ればそう思うこと

だった。

大和はそこにあるだけで誰もを安心させ奮い立たせた。戦局は次第に日本にとって不利なものになっていった。しかしそれでもだった。

大和は呉に、戦場はその姿を見せていた。雄姿を誇示して港にあり海を駆けていた。海軍の者達も他の者達もだ。その姿を見ればであつた。

「まだやれる」

「まだ戦える」

「大和がいる」

「あの船がある限り」

こう信じられるのだった。そして力も出た。彼等は大和を見て奮い立つのだった。そのうえで戦いの中を生き抜いていたのである。

だが戦局はやはり悪化していく。日本にとって。拡大されていた戦線は縮小し遂には沖繩にまで敵が来た。それで、であつた。

大和をだ。沖繩に出撃させることになったのだ。だがこれを聞いてだ。

連合艦隊司令長官である小沢治三郎はだ。苦い顔で言った。

「積極的なのはいい」

「はい」

報告した士官も彼の言葉に応える。

「だがこれはだ」

「これはですか」

「作戦なのか」

小沢はこう言うのであつた。

第二章

「これは果たして作戦なのか」

「それは」

「最早大和しか戦力はない」

そう言っても過言ではない状況であった。今の日本は。

「我々に残された戦力は少ない」

「その通りです」

「その戦力を沖縄に向けてか」

「そしてアメリカを叩きます」

「だが大和は」

どうなるか。小沢にはよくわかっていた。

制海権も制空権もない。そこに航空機の援護なしで向かわせるのである。如何に大和といえどそうした場所に少ない戦力で向かえばだ。

「あの船は」

「しかし最早それしか手はありません」

「それが今の日本か」

我が国だというのであった。

「そういうことか」

「では閣下」

「わかつている」

小沢はまた苦い顔で述べた。

「それではな」

「はい、それでは」

彼も頷くしかなかった。大和を沖縄に出撃させることにだ。それは即ち大和に死ぬということだった。それに他ならないことだった。大和が呉を出港する。それは多くの者が見ていた。そして言うのだった。

「帰って来ればいいがな」

「そうだな。何か今の大和は」

「ああ」

「いつもと違うな」

誰もが出港し海を進む大和の姿を見てだ。感じていた。青い海に浮かぶその巨大な雄姿がだ。普段とは違って見えたのだ。

それを見てだ。彼等は話すのだった。

「悲しいな、何か」

「さよならって言ってるみたいだな」

「そうだな。気のせいだといえけれどな」

「本当にな」

誰もが心からそう思った。今の大和の姿はそう思わせるものだった。こうして大和は出撃した。漁師の親子は今は港からその姿を見ていた。

瀬戸内海は多くの漁港がある。二人はそのうちの一つにいてだ。多くの小船が連なって停泊しているそこからだ。海を進む大和を見ていた。

海は青の中に白銀があり瞬いている。そこに大和の横顔が見える。一目見れば心を奪われるまでに美しい。しかしなのだった。

「父ちゃん」

子供がまず父に言った。

「何かさ」

「大和か？」

「うん、いつもと違うね」

こう父に言うのである。

「気のせいかな、これって」

「いや、気のせいじゃないな」

父親もだ。難しい顔で我が子に話した。

「大和を見るのはな」

「見るのは？」

「多分これで最後だ」

「こう息子に話した。」

「これでな」

「そうなんだ。もう大和は」

「帰って来ない」

「また我が子に話した。」

「ここにはな」

「そうなんだ。もう呉には」

「わし等に姿を見せるのもこれが最後だ」

「彼はまた言った。」

「もうな」

「最後なんだね、これで」

「覚えておくんだ」

「こう我が子に告げた。」

「大和の姿をな」

「うん、忘れないよ」

「子供もだ。こう父に返す。」

「大和を」

「そうしろ。絶対にな」

二人は話すその間もずっと大和を見ていた。大和は今はその雄姿を海の上に永遠に誇示しているかの如くだった。しかしだった。

第三章

大和は瀬戸内から消えた。そのまま沖縄に向かう。途中まで戦闘機が護衛に付いていた。護衛戦闘機は零戦であった。海軍の象徴とも言える戦闘機だ。

緑のその気体に乗リ大和を見下ろしながら。パイロット達も話すのだった。

「本当に何処から見てもですね」

「上から見ても」

「大和はとても」

「ああ、そうだな」

隊長がだ。部下達の言葉に応えて述べる。

「綺麗だな」

「あんな綺麗な船はないですね」

「勇壮なだけじゃなく」

「美しい」

彼等もなのだった。大和のその美しさに魅了されていた。大和は何処までも美しい。それは上から見てもそうなのであった。

しかしだ。その大和を見てだった。彼等はこうも話すのだった。

「けれど。何か」

「悲しいですね」

「見ていると」

「そうだな」

それは隊長も否定できなかった。どうしてもだ。

「もうこれで大和はだ」

「見られませんね」

「沖縄に行く、それはつまり」

「もう二度と」

既に特攻隊が行われていた。鹿屋から飛び立ち散華していく。沖

繩は決死の戦場になっていた。彼等もそれを知っているからこそだった。

「あの大和もですね」

「そうして出撃して」

「もう二度と」

「戦争だ」

隊長はこうは言った。しかしだった。

悲痛な声でだ。部下達に対して話した。話さざるを得なかった。

「何かが失われるものだ」

「はい、そうして何かを得るもの」

「そうですね」

「それが戦争ですね」

「その通りだ。だが」

どうかとだ。隊長は今も大和を見ている。青と銀の海を進む大和は絶妙のバランスが取れた姿である。砲塔も砲身も美しい。

「失われて惜しいものはあるな」

「それが大和ですね」

「そうですね」

「そうだ。大和は帰らない」

彼もだった。このことを確信していた。

「二度とな。あそこまで美しい船はないだろうがな」

「そうですね。海軍の象徴です」

「我が帝国海軍の」

「しかしなのですね」

「帰らない」

またこう言う隊長だった。

「だからこそ今を見るか」

「そうですね。大和のこの姿」

「絶対にです」

「忘れません」

彼等もまた見るのだった。大和は静かに沖縄に向かう。彼等は自分達の許される範囲までその大和の護衛を務めた。そうしてその姿を瞭に焼き付けたのである。

大和は消えた。激しい戦いの末に海の中に消えた。多くの乗員達が運命を共にしてだ。南の海に消え去ったのであった。

呉の港にだ。一つ巨大な穴が開いた。誰もがそれを見て言うのだった。

「寂しいな」

「そうだな。あそこに大和がない」

「それだけでな」

「こんなに寂しいなんてな」

こうだ。海軍の者達が無念に満ちた声で語るのだった。

「これまでどんなにやられても大丈夫だったのにな」

「どうしてなんだろうな、大和がいないと」

「それだけでもう」

「終わった気がするな」

「ああ、終わったかもな」

声から次第にだ。覇気がなくなってきた。

覇気のないその声でだ。語るとだ。目にも身体からもその覇気がなくなっていく。終焉さえをだ。感じだしてきていたのである。

それでだ。彼等はだった。

「海軍も日本も」

「これでな」

「もうな」

「完全にな」

そこに日本の敗戦も見ていたのだ。それまで見なかったそれがだ。現実のものになるいうとしていることを感じだしていた。大和がいなくなりだ。

第四章

それから帝国海軍はもうまともに動けなくなった。終戦を迎えだ。軍艦は一隻残らずなくなった。海軍も解体させられた。

あの零戦のパイロット達もだ。彼等がいた鹿屋の航空基地で頂垂れていた。零戦は僅かに残っている。しかしどの零戦もだった。

「全部あれなんですね」

「くず鉄になるんですね」

「海軍の飛行機も全部」

「そうだ。全部な」

そうなるのだ。あの隊長が部下達に話す。彼等は幸いにして生き残ることができた。それでもだった。

「海軍はなくなる」

「それに零戦もですか」

「大和もいなくなつて」

「何もかもが」

「なくなるんだ。本当にな」

隊長は零戦を見続けている。青天白日の下にいるその零戦も今は抜け殻の様だった。日の丸も今は空しく見えるものだった。

「終わったんだ、俺達は」

「大和もいなくなつて」

「戦争に負けて」

「海軍もなくなつて」

「そうだ、何もかもが終わつた」

隊長の声は今にも倒れんばかりのものになっていた。

「もうな」

彼等もまた終焉の中にあつた。大和がいなくなりその支えを失つてだ。日本は敗戦を迎えてだ。完全な空虚の中に陥つたのであつた。それから歳月が経つた。日本は復興し海軍は解体されたが海上自

衛隊という組織ができていた。そこには海軍の伝統があった。

呉にもだ。多くの護衛艦が集まっていた。それを見てある老人が言った。

「海軍は生き返ったんだな」

こう言ったのである。そこには様々な護衛艦が連なっていた。

しかしだった。老人はそれを見てだ。こつも話した。

「しかしな」

それでもなのだった。そこにはだった。

「大和はいない」

護衛艦の名前は平仮名である。しかしその名はかつての海軍の軍艦の名前を受け継いでいる。もつと言えばその魂でもある。

しかしだった。そこにはだった。

大和はなかった。その船がなかったのだ。

老人はそのことに空虚を覚えていた。そしてだった。

傍にいる小さな男の子にだ。こつ話すのだった。

「なあ」

「何、お爺ちゃん」

「昔ここに凄い船があつたんだぞ」

こつだ。孫に対して優しい声で話すのであつた。

「もうなとんでもなく大きくてな」

「そんなに大きかつたんだ」

「大きいだけじゃなかつた」

その他のことも話すのだった。

「格好よくてな」

「格好よくて？」

「とても綺麗な船だった」

そうだったとだ。こつ話すのであつた。

「そんな船があつたんだ」

「そうだったんだ。ここに」

「凄い船だったんだ」

「その船があつたんだよ」
祖父はだ。また孫に話す。
「今はないけれど」
「またここに出て来るかな」
「出て欲しいな」
願う顔だった。
「本当にな」
「そうなんだね。お爺ちゃんはそう思うんだね」
「あの頃の日本は」
「どうだったか。祖父としてこのことも話した。」
「今よりずっと貧乏で。辛かったけれど」
「そんな国だったんだ」
「けれど大和があつた」
その船がだというのだ。
「大和がいて。ここにいてくれて」
「そうだったんだ」
「今の日本にも。あの船が必要なのかもな」
海を見ながらの言葉だった。
「若しかしてな」
「大和がなんだね」
「うん、そう思うな」
孫に話す言葉はそれだった。目に見えているものは今はもういない大和だった。その二つについて考えながらだ。孫に話す。
「本当に。じゃあ」
「じゃあ?」
「これからおもちゃでも買おうか」
孫に顔を向けての言葉だった。
「プラモデルでもな」
「プラモを?」
「そう、プラモを」

それをだというのである。

「今から」

「何のプラモなの？」

「大和のだよ。とても大きくて凄いプラモを」

「その大和の」

「それを買おう」

また話す彼だった。

「今から」

「そう。それじゃあ」

二人で頷いてだった。そうしてであった。

孫の手を引いてだ。おもちゃ屋に行った。そしてそのうえでその大和のプラモを買ってだ。孫にプレゼントしたのだった。大和を。

大和 完

2010・12・24

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2233s/>

大和

2011年4月4日22時25分発行